

日本大学

➔ NIHON UNIVERSITY

“自主創造型パーソン”の育成を目指した教学改革を学生、教員、職員三位一体で推進中

日本大学では、これからの教育のあり方を全学的に共有するため2011年7月に「N. (エスドット) グランドデザイン」を策定した。大学が育てるべき人材を「自主創造型パーソン」と定義し、教学改革と入試改革が推し進められている。6つの都県にわたり学部ごとに分散する全14学部(2016年度より16学部)を擁する大規模総合大学でありながら、積極的に改革を実行に移している同大学の取り組みと、その成果がどのような形で学生、教員、職員に影響を与えるのか、その現状を紹介しよう。

着実に進む 二つの教学改革プラン

社会的な背景もあり、ここ数年、グローバルに活躍する人材や、イノベーションを創出できる人材など、社会が求める人材を育成する「知の拠点」として大学への期待は高まるばかりである。このような社会的要請を受け、大学での教育のあり方に関する改革についての議論が進んでいる。

その一つに日本大学が着手している全学的な教学改革がある。6つの都県に設置されるキャンパス。法学部、医学部、歯学部、芸術学部など多様な全

16学部(図1)を擁する同大学が、どのように「全学的」な教学改革マネジメントを実施しようとしているのか。先行的事例として注目されているその取り組みの成果を見ていこう。

教学改革のベースとなっているのが、2011年7月に策定された「N. グランドデザイン」(図2)。

具体的には「全学共通初年次教育科目」と「全学共通教育プログラム(仮称)」の二つの教学改革プランを策定し、教養教育の「日本大学版教育スタンダード」と位置づけて16学部のすべてで実施することを目標としたロードマップが描かれている。

構想の全体像は図3のとおり。これらを通して早い年次で日大生としての土台を醸成。そのうえで各学部の特色ある専門教育に接続していくことによって「自主創造型パーソン」の育成を目指す。

日本大学のアイデンティティを学ぶ全学共通科目

教育理念に「自主創造」を掲げ「自ら学び、自ら道を拓く」人材の育成を教育目標としてきた同大学。

「本学には大学としての教育理念があり、どの学部で学ぶにしても学生はみんな、その理念に向って学んでほしいとい



図1 日本大学の全16学部

28年ぶりに新設される2学部

次代の日本を牽引する人材育成を目指し、28年ぶりに2学部が開設される。

●危機管理学部*

危機管理に対する社会的ニーズの高まりを受け、個人、組織、国家を脅かすような危機の実態を分析し、その防止策や対応策の立案に役立つための学問を学ぶ。



東京・三軒茶屋
新キャンパスの
イメージ図

●スポーツ科学部*

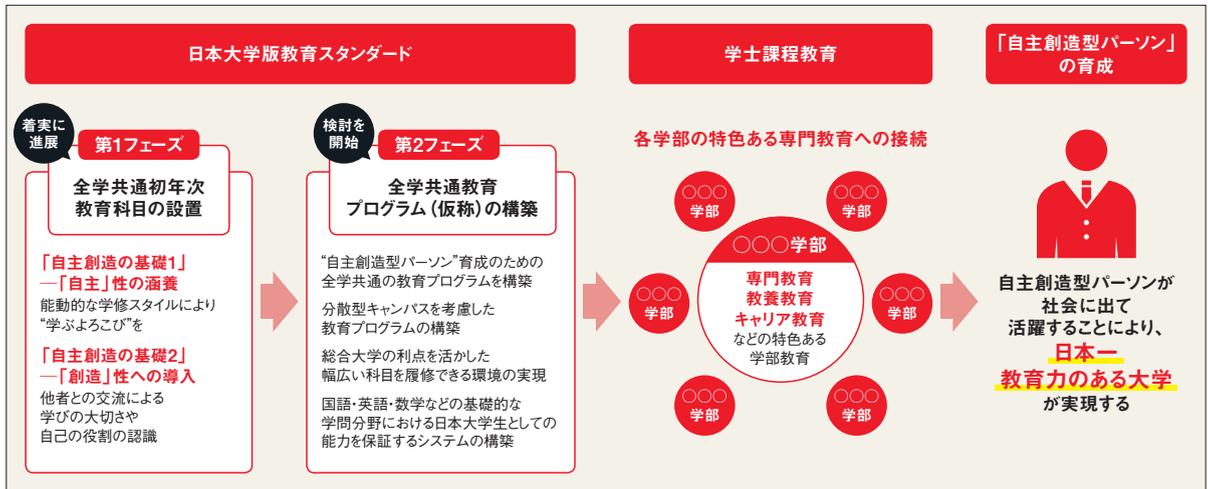
スポーツを理論と実践から学び、ハイパフォーマンスを発揮できるアスリートと、その育成にかかわる指導者のレベルを向上させる。

- 法学部
- 文学部
- 経済学部
- 商学部
- 芸術学部
- 国際関係学部
- 危機管理学部*
- スポーツ科学部*
- 理工学部
- 生産工学部
- 工学部
- 医学部
- 歯学部
- 松戸歯学部
- 生物資源科学部
- 薬学部

学部は上記16学部87学科。このほか大学院20研究科、短期大学部5学科1専攻科、通信教育部を擁する

*2016年4月開設。新学部に関する内容は現在計画中の予定であり、変更となる場合があります。

図2 「自主創造型パーソン」育成の取り組み



う願いががあります。それを徹底していくための教学改革を今行っているわけですが、この改革の成否は、今後の本学の教育に大きな影響を及ぼすのではないかと。私は、そう心して取り組んでいます。(経済学部教授、FD推進センター副センター長 辻 忠博氏)

アクティブラーニングや反転授業を採り入れた全学共通初年次教育科目

特に同大学が注力するのが全学共通初年次教育科目である。2014年4月から3学部、今年度は5学部が実施し、最終的に全学部へ導入する「自主創造の基礎1」を策定した。さらに指導する教員自らも学修目的・教育手法の理解と深化を目的に全学部から担当教職員が参加する全学共通初年次教育セミナーを複数回にわたり開催し、模擬授業やKJ法を用いたグループワ



全学部から教職員が参加した全学共通初年次教育セミナーの様子

ークも行われた。「普段、かかわりが少ない他学部の教員同士でも大学に対して熱い思いをもっていれば、意気投合して、先を見通した議論もできます。」(辻氏)

教職員も自主創造型パーソンとして自ら考え行動し教学改革に取り組んでいる。では他学部で先駆けてスタートした歯学部で実際に受講した学生はどうだったのだろうか？

「歯科医を目指す私たちのなかには、最初は戸惑う学生もいたと思います。ですが、とても興味深かったです。開学当時から今と変わらない学部数をイメージし入学しましたが、法律学校から少しずつ学部を増やして大学が成長し、現在の姿があることを改めて知り大学の教育理念を再認識できました。さらに卒業生の話や本学の歴史をオンデマンド教材で予習する授業もあり、興味深く学ぶことができ、全学共通初年次教育科目を学んでいくと、最終的にどのような教養が身につくかといったガイドラインも示され、理解も深まりました」(歯学部歯学科1年 一瀬光史さん)

第2フェーズの「全学共通教育プログラム(仮称)」

日本大学のすべての学生が身につけるべき「教養」の修得を目的とした、学部の壁を越えた授業の開講準備も

進んでいる。

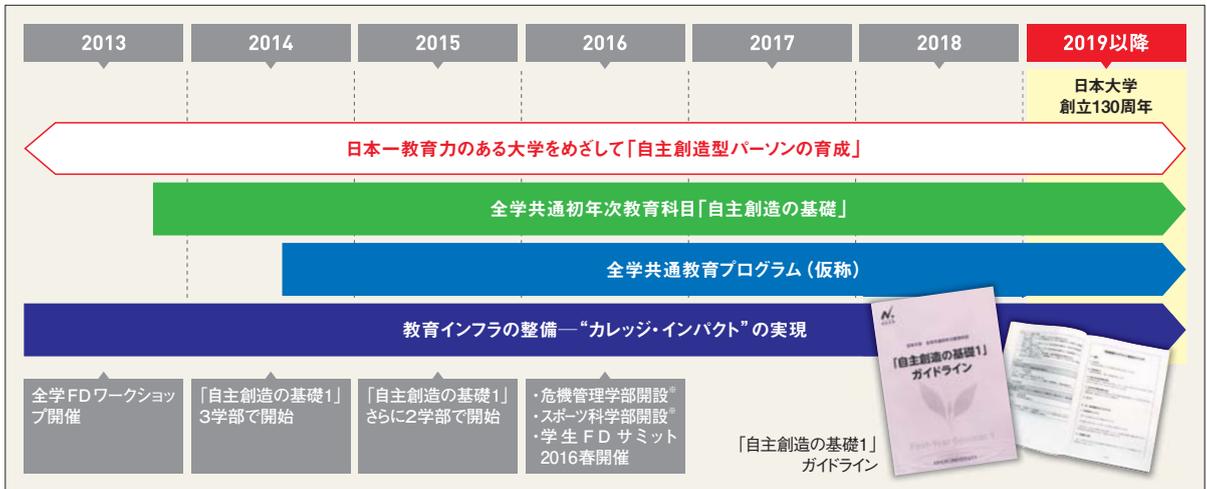
「ジャンルは『日本大学を知る』『日本大学を知る』『日本大学インテリジェンス』『グローバル・スタディーズ』などで構成し、それらを、分散した各キャンパスで共通の内容を学べるようメディア授業も取り入れ、学習効果の向上が期待される対面授業と組み合わせたい『ハイブリッド型授業』を採用する予定です。また、2013年より先行する取り組みとして、すでに複数大学と企業が共同で立ち上げたオンライン教育のプラットフォーム『JMOOC』に参画し一部の講座を無料で配信をスタートしています。」(本部学務部学務課 芳 祥子氏)

学部の壁を越えた改革はICTを活用した授業のしくみだけではない。一連の改革とかかわりが深い活動として、同大学が力を入れているのがFD(ファカルティ・ディベロップメント=組織的な授業改善活動)である。全学部の教職員の参加による「全学FDワークショップ」を毎年開催し、2014年度から学生の改善を考える「日本大学 学生FD CHAmmiT(チャミット)」を継続して開催している。

FD活動そのものが学生の自主性を養う機会

「学生参画型FD活動に欠かすことの

図3 「N.グランドデザイン」ロードマップ



日本大学
経済学部教授
FD推進センター
副センター長
辻 忠博氏



日本大学
文理学部
国文学科2年
徳田萌乃さん



日本大学
歯学部
歯学科1年
一瀬光史さん



日本大学
本部学務部
学務課
芳 祥子氏



できない『しゃべり場』が全学的に大きな広がりを見せています。教員や学生の考えを知る機会は、これまで限られていましたが、『しゃべり場』が広がることによって、本部の職員も、学生の意見や教員の考えを吸収することができる。これは普段、教員や学生との接点が少ない職員には、とてもありがたいです。」(芳氏)

では、教員、学生の立場ではどうか？
「教員にとってもFD活動は、なかなか得難い場です。FD活動での話し合い



昨年開催された「日本大学 学生FD CHAmmit」

をする時に遠慮は禁物です。本音を話すというルールがありますから、普段は聞けない忌憚のないさまざまな意見を職員、学生それぞれの立場から直接聞くことができる。非常に有意義だと思いますね」(辻氏)

「私はFD活動に友人を誘います。それは『日大って、こんなに開けたところなんだよ』と伝えたいからです。活動をすればするほど、大学生生活って自分次第でどんなふうにもアクティブにできるということがわかりました。私たちの活動、意見を、先生や職員の方も、とても温かい眼差しで見てくれ話を聞いてくださいます。在籍する文理学部には、学生が授業をつくる『プロジェクト教育科目』というものがあり、文理学部学生FDワーキンググループでは、定期的に『しゃべり場』を開催して、教職員と学生が本音を話し合える場があります。」(文理学部国文学科2年 徳田萌乃さん)

2016年3月、第12回目となる「学生FD

サミット2016春」が同大学をホスト校として、「日本大学 学生FD CHAmmit」と同時開催する。

「テーマは『キャンパスを彩る三原色』で、三原色は学生、教員、職員が相互にかかわることを意味しています。実はこのテーマは本学学生が考えてくれました。学生がこのような意識を高めているということ非常に頼もしく感じています。本学の教学改革を推進していくにあたって、学生と協働するFD活動は大きな役割を担っています。」(芳氏)

教学改革の一環として、2011年にスタートした「日本大学統一入試N方式」。また、28年ぶりの新学部として、東京・三軒茶屋に開設される「危機管理学部*」と「スポーツ科学部*」。改革は多岐にわたっているが、それらすべてが「自主創造型パーソンの育成」という教育目標につながる。日本大学のドラスティックな改革にも注目していきたい。